



北越雪譜

二編 春

ル 4  
6316  
4



北越雪譜  
二編  
四卷

越後 鈴木牧之編撰  
天保辛丑新刻

京山人百樹增修  
書肆 文溪堂

江戸  
京水百鶴畫圖  
發販

北越雪譜二編叙



萩野武

北越雪譜六卷越後塩澤鈴木牧之老人  
雪窗圍爐寒爐隱几隨筆其事出實脚  
徒非構空架虛之談然翁固不必期於梓行矣  
嚮者郵筒懇乞校正者之艾刈蕪蔓披擲著  
英先輯之卷以為初編告約使書肆文溪堂刊布  
之於後越音之奇平彙萬狀供卧遊資錦室  
婦妾市窓妻婢以詳知越雪解士通人或云



雪譜二編

序一

格致之一助爰以雪譜之名頗踴躍於是乎書  
埒類乞嗣撫蓋以知吾球穉在也余謂不踏越地  
不可說越事仍丁酉之夏携兒京水越遊救  
十日有紀行作再採數條刪補翁之穉穉以爲二  
編稿定將置序言有頃者晚暮連日放晴紅酣  
綠戰花神旺壯遊心勃興欲詣賽成田山感怒王祠  
以療雞毛之病矣夫成田山香火之盛世々所知也凡  
自江戸到成田者抵小綱街橋岸一買搭船永路直

往行德都人皆以爲捷徑蓋行德一本會也不必成  
田香火者搭船常並列千楫岸待行客是以此俗呼  
茲岸云行德河岸呼茲船云行德船余亦臨此  
搭船其所供載者多是庸界雜沓穢衆口味  
嘈余傍在一僧一士一商僧年齒六十許從一童偕  
士可二十四五誇嘗輕俊殆似學究高半老樓撞  
市樣相俱接膝余籍默不敢出一語凡屋漸老處岸  
茅葺櫻木浮雪嫩柳吐烟村落春景百逞如畫

頗水行之會心也船既過半途庸身多就賦  
 嘈々自羅窓之可悅壯士出墨斗持懷楫竟旬果  
 先書生也老僧以鑿鏡披書士閣筆曰尊者所  
 孰是何書僧曰北越雪譜士曰僕嘗讀之兔園冊子  
 何足比閱僧曰貪此一錫畱干北親知越雪故特購之  
 供以續矣今閱京山人序彼少識字乎士曰否不抗  
 夫京山者文場之奴隸藝苑之僮僕也近年隨落  
 子裨史院本之泥中汚塗姓名遂不能脫其窠窟

強於彼自為才子漁金人瑞之流亞文亦爭許  
 之矣僧怡然笑而不應余佯睡閱之高已解曰鄙人  
 書要也能識刊行之趣凡上梓之書不論編輯之荒  
 誕與詞章之奇雋只以多璫為大著述奉其作  
 者為搖鈴樹翁強感服顏士新書若其不吝唾  
 而不顧是書梓之通義曹耦之常態也北越雪譜  
 初編之梓一舉數七百餘部刷板裝本至不暇給  
 故二編刻後竟當有近矣士不然其言猶舌不止

鼓角類鼓傳手釋卷曰論說姑置足下歲京山  
 年否士曰不識僧曰我十年前あは彼會於一  
 舎僅得一面識不為無母縁言畢遽然拍余背  
 曰京山老人醒眠長兄忘我欤余愕然不得應時  
 船者行懷之岸舟中之人皆上岸不復如叨吐欵  
 于茲矣此夕然言於逆旅燈下以爲序云

天保十一年庚子潔存

京山人百樹并書



北越雪譜二編凡例

此書全部六卷牧之老人の眠を驅の漫筆梓を俟ざるの稿本あり故小走  
 墨亂寫一圖も亦抄画あり老人余小示して校訂を乞ふ因て其の  
 雜を刪り校訂清書一圖ハ豚見京水小画一ありの三卷書費の  
 請小應り老人小告て梓を許し以せ小布し小發販一奉して七百餘部を  
 鬻り是れ依て書肆後編を乞ふ然ども余が机上の編筆小忙々屢稿を脱す  
 の期約を失ひ而も近且務て老人稿本の殘冊を訂し以其乞小授く  
 牧之老人の越後の聞人あり嘗貞父朴實を以聞え屢縣監の褒賞を拜して氏  
 の國稱を許し生計の餘暇風雅を以四方小交る余が亡兄醒來別号翁の鳴書の  
 友あり而も余も亦是れ小嗣る老人余小越遊を樂しとて年あり余固山水小耽の  
 癖あり而も小遊心勤くたゞも事小幼て果さず丁酉の晩夏遂小豚見京水を從  
 啓行を始り越後の諸勝を尽さんと思ひ越地小入後年稍侵して穀價貴踊

人心穩るるをゆゑに越地を踐あて僅わずか小十さありあるとて旅中り小於ちて耳  
 目を新あらせし事を奉たげ此書この小増ま修しゆも百樹もも曰いふ所の是こ  
 前編ぜん小載のる三國嶺さんこくりやうの圖ずハ牧ま之の老人らうじんハ草画そうが小傲あて京山きやうざん私儲しせ満山まんざん小松樹しょうしょうじゆを  
 画えり余越遊よあつゆの時三國嶺さんこくりやうを踰こへ小此嶺このハさうあり前後ぜんごの連岳れんがくをへく松しょうを  
 見みる此地この小ちをへて越後えちごハ松しょうの少すき國くにあり三國嶺さんこくりやうを知しる人ひとハ松しょうを画えるを笑わらふ  
 也なり是老人このハ本編ほんの誤あやり非ちむ京水きやうみづハ蛇足へびあしあり  
 山川さんせん村庄ちやうまうハさうあり凡物ぼんぶつの名なの訓しよんハ清濁せいじやく小ちより越後えちごの里言りごん小ちならむも  
 ある然しかども里言りごんハ多く俗訛ぞくしあり今姑俗いまこ小ちよりあり本編ほんハ音訓おんしんの假名かを  
 下くださるゝけハ余よハ必かなずあり謬あやを本編ほん小驅くこと勿なま  
 余也固よ淺学せんがく小ちて多く書しよを不讀よ寒家かんか小ちて書しよ小不富ふ少すく藏かくせも屢しばしば祝融しゆじゆう小  
 奪うばて架か上じやう蕭然せうぜんより依よ之の増修まうしゆの説せつ小於ちて此事このハ彼書か小見みと覚えも其その上じやう音  
 を藏かくせざるゝ急就きやくきゆうの用もち小弁べんせむ職しやく癖くせきもるが多おほし且かつ淺学せんがくあり引編ひき

よりも最たまなるべし

本編ほん雪ゆきの外ほか它たの事ことを載のる雪譜ゆきずの名なを空あくす小似にまさども姑記こして好事こうじの  
 話柄わなづか小具ぐを増修まうしゆの説せつも亦然また然しかり  
 雪ゆきの奇状きじやう奇事きじ其大槩そのハ初編しよほん小出いせり猶なほ軼事えつじ有あるを以此この二編に小記きを已や小初編しよほん  
 載のるも事ことの異ことハ不舎ふて之これを録ろくを盖刊けい本ほんハ流傳りゆうでんの廣ひろきりのゆゑ初編しよほんを  
 讀よむ者ものの為ため小ちをの意いあり前後ぜんごを讀よみ其層見その重出じゆうしゆを話わこと勿なま  
 釋しやくの字釈じしやく小作しやくの外澤のを沢たく驛えきを取とり作しやくハ俗ぞくありあるとて卷中まき驛澤えきの字じ返  
 姑俗こ小ちより取とり作しやくハ以も梓し繁はんを省しやうく餘よの省字しやうハ皆みな古法こ小ちより  
 卷中まきの画え老人らうじんハ稿本かうほんの竹画ちやくがを真まハ或あるハ京水きやうみづハ越地えちご小字じハ真景ま或里人まの話を  
 聞きく圖ず小作しやくりあるとあり其地この小照しやうして誤あやを責せることありと  
 老人編らうじんを嗣ついでの意いありゆゑに初編しよほん二編にとの前編ぜん後編ごとの事ことを  
 天保十一年庚子仲春  
 京山人百樹識

一之卷 目錄

越後の城下

古哥あゝ旧蹟

雪の元日

雪の正月

玉栗。羽子擧

雪吹小焼飯を賣

雪中の戯場

家内の氷柱

雪中の用具

輜の説

寒氣の力

シガ

夏の雪

削氷

雪の多少

浦佐の堂叅

通計十六條

北越雪譜二編 卷一

卷之一

越後塩澤

鈴木牧之編撰

江戸

京山人百樹増修

○越後の城下

越後の國往古ハ出羽越中ノ距リ一事國史小見ゆ今ハ七郡を以テ  
 一國とを東小岩船郡古小岩小作 蒲原郡新海の淡比 西小魚沼郡海小  
 北小三嶋郡海小 刈羽郡海小 南小頸城郡海小 古志郡海小 以上七郡也  
 城下ハ岩船郡小村上内藤侯 蒲原郡小柴田溝口侯 黒川柳沢侯 三日市  
 柳沢彈正侯 三嶋郡小与板井伊侯 刈羽郡小推谷堀侯 古志郡小長岡牧野  
 七万石 頸城郡小高田神一介侯 糸魚川松平日向侯 以上城下の外頗豊饒を為  
 十石 魚沼郡小千谷古志郡小三條三嶋郡小寺泊。出雲崎刈羽郡小  
 柏崎頸城郡小今町等 蒲原郡の新郷ハ北海第一の渚也福地たす





善信とて三十五歳の時諱口小係りて越後小謫する時小承元元年二月あり後五年を経て勅免ありて法を弘ん為とて越後小のまじこと五年あり故小聖人の旧跡越地小残り弘法廿五年御歳六十の時洛小飯玉あり越後小五年下野小三年常陸小十年相模小七年弘長二年十月廿八日遷化壽九十歳件の柿崎の哥も弘法行脚の時の作ありて  
 此外▲有明の浦▲岩手の浦▲勢波の渡▲井栗の森▲越の松原の里も古哥ありて他國小もわづら名所ありてなれ小越後もまじりて  
 さて今を去夏天保土子あり五百四十一年前永仁六年戌のころ藤原為兼卿佐渡左遷の時三嶋郡寺泊の駅小順風を待玉ひ間初君との遊女をゆ玉ひ小初君が哥小ものおもひて路の浦の白浪も立ちてありありとこそまじり此哥吉瑞とありてや五年たるとのち嘉元元年為兼卿飯洛ありて九年の後正和元年玉葉集を撰の時初君が件の哥を入

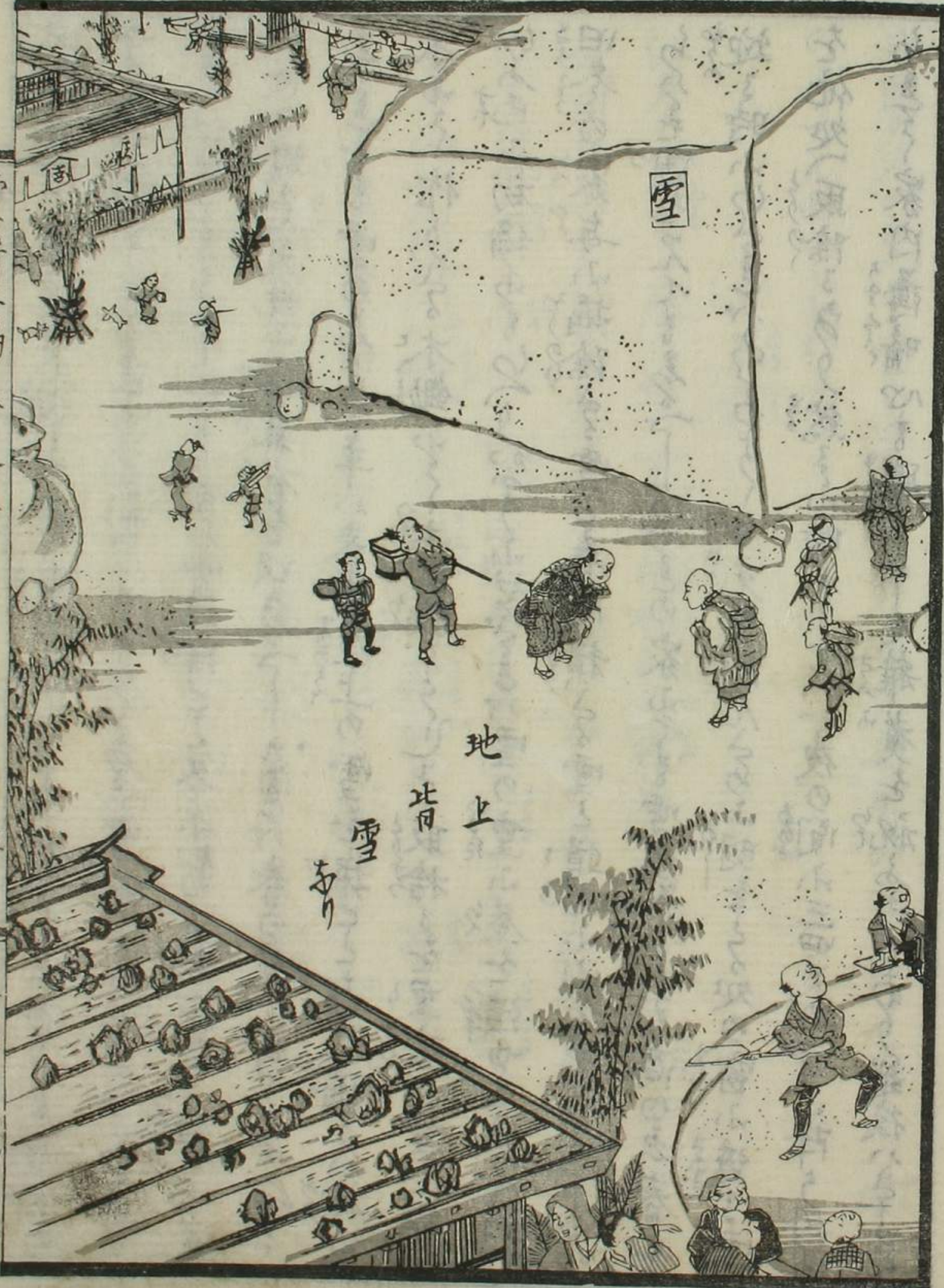
とらと玉あり是を越後第一の逸事とて初君が古跡今寺泊小在り里俗初君屋敷とて貞享元年叙門万元記とて初君が哥の碑ありてか断破を享和年間里人重修して今小存せり

○雪の元日

凡日本国中不於て第一雪の深き国ハ越後ありと古昔も今も人の事ありあるととも越後小於て最雪のふるきこと一丈二丈小ありて我住魚沼郡あり次小古志郡次小頸城郡あり其餘の四郡ハ雪のつる夏三郡小比まじり浅し是を以論をて我住魚沼郡ハ日本第一小雪の深降あり我々の魚沼郡の塩沢小生と毎年十月の頃より翌年の三四月のころまじり雪を視事已小六十余年近日比雪譜を作ると雪小麓居のまじりあり。さて我塩沢ハ江戸を去て僅小五十五里あり直道を量るるや近うて雪のた時あり健足の人ハ四日ありて江戸小

けりるべし其江戸の元日を聞かば借神朱門の夏はあつむ市の中八千門  
 万戸千歳の松をかざり直る御代の竹をたて太平の七五三を引こ  
 る小新年の賀客麻上下の肩をつつ福を往來さす小万歳もうら  
 まドの女太夫と鳥追ひの三味線ふめどてた哥をうたひ娘の児の  
 やり羽子男の児の帟鷲見さの聞のめどなきあふ初日影花や  
 小き一昇る實小新玉の春こそけけは其元日も此雪国の元日も  
 同元日あるとも大都會の繁花と邊鄙の雪中と光景の替り事  
 雲泥のちがひあり○そも我里の元日野も山も田圃も里も平一  
 面の雪小埋り春を知づ庭前の梅柳の類も去年雪の降る秋の末  
 小雪を厭ふ丸太と豆と縄縛ふ遇さる雪の中小あり元日の春  
 をさすささる人も三四月小くささる梅花を不見翁が向ふ春も  
 稍景色とのふ月と梅と吟ぜり大都會の正月十五日ありま

山里の万歳邊梅の花と邊鄙の三月あつむ門松の雪の中一建  
 七五三ささる雪の軒小引さる禮者ハ木履をさき従者ハ藁靴あり  
 雪徑小階級ある所小くささる主人もささる小をささる此げささる  
 礼者小くささる人皆ささる雪全く消夏のをささるめ小くささる草  
 履をささる事ありささる元日の初日影も惟雪の銀世界を照その  
 一つささる春の景色を不見古哥小「花をのぞ待らん人ハ山里の雪間の  
 草の春を見せむや」ささる雪浅き都の事ささる雪国の人ハ春小くさ  
 春をささるをささる生涯を終ることをささる繁栄豊腴の大都會  
 小住ささる歳々梅柳嬾色の春を樂む事實小天幸の人といふべし  
 ○雪の正月  
 初編小くささる如く我國の雪ハ鷲毛をささる稀あり大くささる白砂を降るが  
 如く冬の雪ハささる凝凍ささる春小くささること鉄石のごとく



雪譜二編卷之二

五

文溪堂藏



行  
驛中の正月積雪の圖

雪譜二編卷之二

文溪堂藏

冬の雪のこもりたるは湿氣あり乾る所のこもりたるは暖国の  
 雪小異処あり雪言二卷と云ふことありては雪解と云ふの事ありあり  
 春ふりては年ふりては雪の降ること冬ふりては雪も積ること五  
 六尺小過を天地小陽氣有を以てあること一は春の雪ハ解るも中  
 まるごとくも雪のふるまひ年ハ春も屋上の雪を掘りてあり掘りて木の  
 木中作りたる木鋤とて土を掘りて取り捨るを里言ふ雪を掘り  
 りの已小初編めりりかやふせむと云ふ雪の重小屋を潰ゆありされが  
 旧冬の家毎小掘除る雪と春降積る雪と道路小山をふること下小の  
 らんを圖をえんもあること一は雪の家よりも雪ハ家よりも高ゆ春を  
 迎ふ時ふりては日先を引んては小明をある所の窓小透る雪  
 を他処へ取除るあり然る小時とて一夜の間小三四尺の雪小降るあり  
 らんて家内薄暗心も朦々として雑煮を祝ふことあり越後ハさりと

北国の人ハまづ雪の中小正月をきるハ毎年の事とて正月ハ暖国  
 の人ハ又せむことあり

○玉粟たまぐら

江戸の見曹ハ春の遊ハ女見ハ備毬羽子擲男見ハ紙鴉を揚がるハ  
 我國のごどもハ春ふりては前小のころ地とて雪ありたる如き  
 けむ歩行小苦路小遊をある事少く玉粟とて見戲  
 あり春のあそび始ハ雪を山成やまなり雑卵ざわいの大き小握りて其上へ  
 と雪を幾度もふりて足踏堅ありハ柱小あてて堅固ことを肥と  
 りて手毬の大き小ありたる時他の童ハ作りたる玉粟を庇下る小置  
 一ハ我が玉粟を以他の玉粟ふらあつて強き玉粟弱き玉粟を碎くを  
 りて勝負を争ふ此戲所ふりて。コンボウ。コマ。地独樂。雪玉の里  
 勝合ありあり此玉粟を作ら小雪小少く

塩を入るる堅まるる石の如くもあふ小兒互小塩を入るを禁むるありて  
を以てする時ハ塩ハ物を堅むる物あり物を堅實小するゆゑ塩藏小を  
ハ肉類も不腐朝夕嗽ハ塩の湯水を以てする齒をこする齒の命を  
長くするゆゑ玉粟ハ見戯あるも塩の物を堅まる證と見る小たり故小  
あふ小記せり又童のあそび小雪堂といふ夏あり初編小記せり

○羽子擿

我里俗を存せんとゆゑを  
くまといふうちをのこるる

江戸小正月せし人の話小市中ゆく見上るるより松竹を飾るるも小  
美しく粧ひする娘ら彩るる羽子板を持つ並び立る羽子をつくまぬら  
ふも大江戸の春ありとぞ我里の羽子擿ハ邊鄙といひあつたか  
姿小あつた正月ハ奴婢ども少ハ許さ遊をあつたむゆゑ羽子を擿  
んとするまづ其処を見せ雪をふらふ角力場のごとくふあ羽  
子ハ渡疏を一すしやと筒切小あつたこも小鶴雉の尾を三本さしつる

江戸の羽子小比まが甚大ありこまを擿小雪を掘木鋤を用ふ力小するを  
て擿ゆゑ小空小あがる夏甚高しやう小大ある羽子ゆゑ小童ハまど  
らむあつたさする男女うちまどやまどまどまどあつた此戲をあそ  
ありハの羽子を並びあつてつゆあふあやまち取落しつるもの始  
小定ありとあつたハ雪をふらふけ又ハ頭より雪をあふするその雪襟  
懐小入りて冷小耐ざるを大勢か笑ふ窓よりこまを視るも雪中の一興  
あり京傳翁が骨董集小上編小下学集を引く羽子板ハ文化十二年  
より三百七十年むらりの前文安のころありゆゑのゆゑをこまよりも  
あやまら小ありし事ハ詳あるもこまはこまより又下学集小羽子板  
小コキイタと両かちをつけしこまの子こまも羽子の夏ありとあり我  
国も江戸の如く小兒女のをねをつく所もあり

○雪吹小焼飯を賣

塚山嶺雪吹圖



○風雪のまづき



雪国ゆきくにの凍懼物こむけものの冬の雪吹ゆきふき。ホウラ春の雪ゆき顔かほあり此奇状さいきじょう奇事さいじ已おと不初編ふしつへんゆもりりまこと一奇談いちきだんを聞きるゆゑらふちりて暖国ぬるくにの話柄わたりがらとを○をもく金錢かねぜにの貴うぶこと魯氏ろしが神錢論しんせんろんの尽つくたす六今いまさういふくもあゝま年の凶作あやふしなわざいゆとより事こと小臨せうりんで餓うれいする時小判せうはんを甜あまく腸はらハ彭張ほうちやうを餓うれする時の小判せうはん一枚ハ飯いひ一碗いっぺんの光ひかりをうさば五十余年ごじゅうねん前の饑饉ききんの時或所あるところあり餓死うせし一人の懐なご小判せうはん百兩ひゃくらうありーとまてぬ○さ小我せうがが魚沼郡うまぬまぐん菽上しゆくじやうの庄ぢやうの村むらより農夫のうふ一人拍寄ちやくぎの馭やふりる此路程このちりぢ五里計ごりぢあり途中ちゆうぢうあり一人の芋いも總そう商人しやうじん小遇せうごハ路伴ろばんありー往ゆけり時ときハ十二月じふにがつのもどりありーが數日かずひの雪も此日晴このひははらくまづ西人せいじん窟くつをあづく心朗こころはらくまづ已おと小塚せうづかの山やまより小嶺せうりやう小せうがけり時雪国ゆきくにの恒とことく晴天せいぜん俄い凍こ雲うんを布ふ暴風ぼうふう四方しやうほうの雪ゆきを吹散ふきさんして白日はくじつを覆おほハ咫尺せきせきを弁べんせむ袖襟そでえりハ雪ゆきを吹入ふきいれさく全身ぜんしん凍こて息いきもつゝあゝ大風たいふう四面しやうめんよりまきりまづー雪ゆきを渦うず小卷揚せうまきある是を雪国ゆきくにの雪吹ゆきふきといふ此このまづ不意ふい小ありものゆゑ晴天せいぜんといふとも冬ふゆの他行たけいあり必かならず蓑笠すゐかさを用もちること我國わがくにの常とこあり二人ふたりハ棧せき小雪せうせきを漕こつ雪ゆき小あり互たがひ小声こゑをうけり助すけあり辛からく嶺りやうを逾こる小商人せうしやうじん農夫のうふありかり今日の晴天けふのせいぜん小柏寄せうはくぎまづ何なにともいひざりゆゑ辨當べんたうをりて今空腹こくぷ小ありん心寒こころひや小堪かむかくて貴殿きでん小伴せうばんと雪ゆきを漕こことありまといぜんの話わたりがら小ありまの懐なご小弁當べんたうありまぬ夫おとを我われ小せうとハたまふまづ唯ただ小貫つらるまづ小錢せうせん六百ろくひやくあり死しり活いきるの際とき小ありて此錢このせんを何なにもらせん六百ろくひやくあり弁當べんたうを賣う玉たまといふ農夫のうふハ貧乏ひんぱんの者ものありーゆゑ六百ろくひやくとまづ大おほふとらまづ燒飯やきいひニにを出だし六百ろくひやくの錢せん小替かけり商人しやうじんハ懐なご小ありて温ぬるのさあまづ燒飯やきいひの大多おほをニに食くし雪ゆき小咽のどを潤うるし精神せいしん健すこふあり前まへ小ありん雪ゆきをこまけり○かくていそぐ雪ゆき吹ふ

凍こて息いきもつゝあゝ大風たいふう四面しやうめんよりまきりまづー雪ゆきを渦うず小卷揚せうまきある是を雪国ゆきくにの雪吹ゆきふきといふ此このまづ不意ふい小ありものゆゑ晴天せいぜんといふとも冬ふゆの他行たけいあり必かならず蓑笠すゐかさを用もちること我國わがくにの常とこあり二人ふたりハ棧せき小雪せうせきを漕こつ雪ゆき小あり互たがひ小声こゑをうけり助すけあり辛からく嶺りやうを逾こる小商人せうしやうじん農夫のうふありかり今日の晴天けふのせいぜん小柏寄せうはくぎまづ何なにともいひざりゆゑ辨當べんたうをりて今空腹こくぷ小ありん心寒こころひや小堪かむかくて貴殿きでん小伴せうばんと雪ゆきを漕こことありまといぜんの話わたりがら小ありまの懐なご小弁當べんたうありまぬ夫おとを我われ小せうとハたまふまづ唯ただ小貫つらるまづ小錢せうせん六百ろくひやくあり死しり活いきるの際とき小ありて此錢このせんを何なにもらせん六百ろくひやくあり弁當べんたうを賣う玉たまといふ農夫のうふハ貧乏ひんぱんの者ものありーゆゑ六百ろくひやくとまづ大おほふとらまづ燒飯やきいひニにを出だし六百ろくひやくの錢せん小替かけり商人しやうじんハ懐なご小ありて温ぬるのさあまづ燒飯やきいひの大多おほをニに食くし雪ゆき小咽のどを潤うるし精神せいしん健すこふあり前まへ小ありん雪ゆきをこまけり○かくていそぐ雪ゆき吹ふ

まま〜 甚〜 様を穿ゆゑ道邊〜 日も已小暮あんとは此時小い  
 うり〜 焼飯を賣する農夫ハ肚減て勞と商人ハ焼飯小腸満足を  
 め〜 往農夫ハ屢後るゆゑ終ハ棄〜 独先の村小い〜 家の小  
 入り〜 炉辺小身を温〜 酒を酌始〜 蘇生〜 ぢぢを〜 けり  
 〇さて志〜 〇あ〜 〇と呼声速〜 聞〜 家内の者き〜 つけ  
あきふゆゆい〜 雪中人小い 雪吹倒〜 助けよ〜 近隣の人をも  
けをもふ〜 雪中の常と よび集め手毎小木鋤を持〜  
木鋤を持ハ雪小埋りし雪吹たるとの 走行〜 がや  
 あり〜 大勢のもの二人の死骸を家の土間(うま)昇入〜 商人も立寄  
 〇と巴 最前焼飯を賣する農夫ありし〜 宇徳商人或時余が  
 俳友の家小追雷の話小件の事を語り出〜 彼時我六百の銭を惜  
 焼飯を買ぞんバ雪吹の中小餓死せん〜 農夫が如〜 今  
 日の命も銭六百のうちあり〜 笑ひ〜 俳友が語とり

○雪中の戯場

五穀豊熟〜 年の貢も心易く捧げ諸氏鼓腹の春小遇〜 時  
 氏神の祭あど小遭〜 幸小地芝居を興行する夏あり役者ハ皆  
 其処の素人あ〜 近村近取より來るあり師匠ハ田舎芝居の  
 役者を僱ふ始小寺あ〜 群居〜 狂言をさ〜 のちを〜 の  
 役を定む此群居の議論紛〜 一度ゆ〜 果〜 事定  
 りてのち寺小於て替古を〜 む技熟〜 のち初日をさ〜 衣裳艶  
 のるゆゑ是を借を一ツの業とま〜 のあり〜 物の不足〜 此芝居  
 二三月の頃ま〜 事あり此時ハいま〜 雪の消ぎる銀世界ありさ〜  
 芝居を造る処此役者等が家ハさ〜 あり親類縁者朋友より人を  
 出〜 あ〜 人を傭ひ芝居小屋場の地所の雪を平ら〜 踏か〜  
 舞臺花道樂屋棧敷のるゆ〜 皆雪をあつめてその形〜 杯



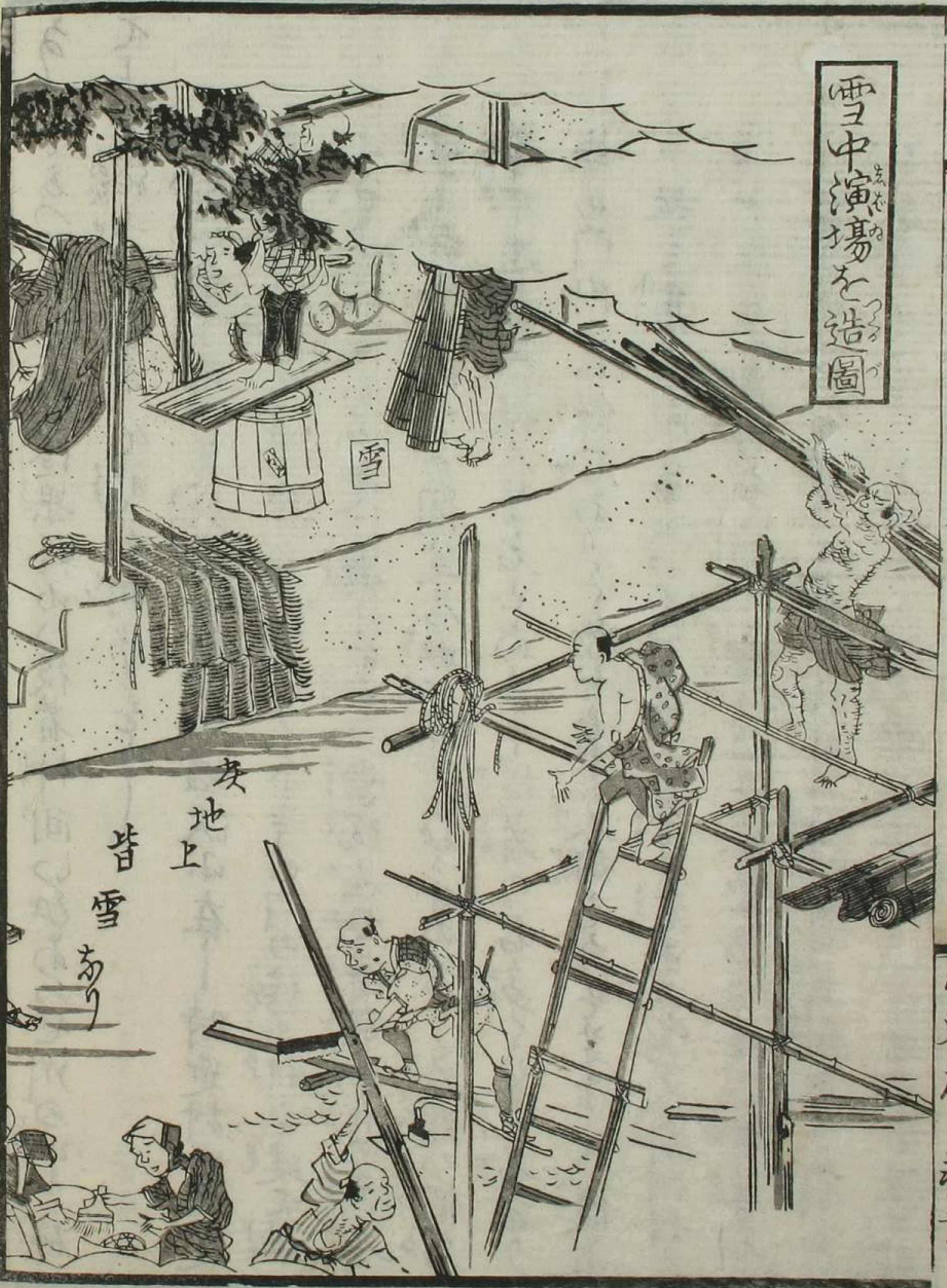
ありよく造ること下の圖を見て知るべし此雪少く造りたる物天又人  
 工をたぎけて一夜の間小凍く鉄石の如くふるもあつたやど大入ふても  
 さぐまの崩る氣づひひり孫生の頃ハ雪もや稀るまば春色の空  
 を見く家毎小雪圍を取除くころあまは処より雪かこひの丸太あ  
 るハ雪垂るまば茅少く幅八九尺廣き二間をりふつりする薦を借  
 あつめくまべての日覆とあまは花をりハ雪かこ作りする上小板を  
 あつめく此板も一夜のうちに小氷つきま釘付小まするより堅く暖  
 国小比ま論の外あり物を賣茶屋をも作らむの処も平一面の  
 雪のまば物を煮処ハ雪を窪め糠をちりく火を焼ハ雪の解る事  
 妙あり○さて戯場の造作成就して春の雪よりつぎま連日晴を  
 見む興行の初日のびる時ハ役者ふありする家ハさく此まをを見ん  
 とく諸方小逗留の客多く毎日空をあらめて晴を待む客のゆて

あつてもあつて始倦果終ハ役者仲間いひあせ川の氷を碎  
 て水を浴干垢離しく晴を祈るまをり

百樹曰余丁酉の夏北越小遊びく塩沢小在一時近村小地芝  
 居ありと聞く京水と俱小至りく小寺の門の傍小杭を建て横  
 小長き行燈あり是小題く曰當院屋根普請勸化の為本  
 堂小於て晴天七日の間芝居興行せむものあり名題ハ假名  
 手本忠臣藏役人替名とありく役者の名多くハ寢名あり  
 寺の門内小假店ありく物を賣り人群をあらま芝居小假小  
 戸板を集く困る入り口ありく小守る者ありて一人前何程と  
 價を取ると屋根普請の勸化あり本堂の上り段小舞臺を  
 作り掛左小花道あり左右の棧敷ハ竹林簀薦張あり土間小  
 薦を布筵をあらま旅の芝居大槩かくの如くと市川白猿が話



寺



雪中演場を造る圖

雪

地上  
皆雪あり

ふもきぬ棧敷のらかこふ欲然やうな毛氈をうけらじろふ彩色  
 画の屏風をたてゝけのをまあり四五人の婦を綿帽子を  
 邊鄙小古風を失さるゝ観人群をうけて大入ある猿の如き童ども樹  
 木のわけてもあり小娘が荒を提りて氷とよびて土間の中を賣る  
 荒のうへ木の青葉をまき雪の氷の塊をうゝ茶を賣つて氷  
 を賣るゝ甚めづじ氷のこと削氷の條ふらぶら〇さて口上り  
 出く寺へ寄進の物あふは役者へ贈物餅酒のふく人の名を  
 奉品を呼ぶ披露一此処忠臣藏七段目をすまりといひ幕開  
 ちかふ小折ゝ山岩井玉之丞とく田舎芝居の戯子あり一頗る美  
 あり由良の助小折ゝ余が旅中文雅を以識人あり年若あれ  
 かる戯をもあをあるべし常あらうり今この坂東彦三郎小似  
 たり技も又観ふ足り寺岡平右門小ありハ余が客舎小きる籠頭

ありこども常小かをり関三十郎小似て音声もまゝ天然と関三の  
 如し余京水と相顧て感し京水たつと小イヨ尾張屋と巻けら尾  
 張屋ハ関三の家号ある事通しぐまや尾張屋とやむるものひとり  
 ろ一幕あゝとせし小守る者木戸をいさむる便所ハ寺の後小  
 あり空腹あゝ弁當を買玉取次りさんといふ我のふあゝ人  
 又いさむるふ人散ハ演場の蕭然を厭ふゆゑあるべしけくわ  
 出所あゝんと尋し小此寺の四方垣をめぐりて出へる際し折  
 ろ一童が外より垣をやがりて入りたるその穴より兩人入りてハ  
 こども又可笑しつてぞあり

○家内の氷柱

旧冬より降積る雪家の棟よりも高く春小ありて家内薄曇り  
 めも高窓を埋る雪を掘のけり明をとるこ前ふもいさか如し此

屋上の雪ハ冬のうちまをく掘のつ度く小木鋤こすきをくく屋  
 上を損ねむる変あり我國の屋上やねもやぐ板いた葺ぎあり屋根板ハ他国  
 小比こひとろ厚あつく廣ひろく葺ぎする上小さん筭ざ木ぎといふ物を作り添ま石いしを置おき  
 鎮おし風を防かぎの便やすとそとそゆふ雪をりのつとどまはくを  
 ことろどそその雪のうま早春さうしゆんの雪ありつり凍こゆふ屋根のゆ  
 きをままるまるまるま春も稍や深ふかままるま雪も日ひああるあるあ解とけああるあるあ焼と火ひの所ところ雪早  
 く解とけふふいいるるかかの屋根の損ねトとるる処ところ木羽このの下したををくくりりああじじて  
 雪水漏ゆきゆふ夜中よ俄いふふ畳たたををとりりのけ桶お鉢はちののああるるををああるるべ  
 て漏もををううるるももるる処ところをを修しゆ治ちととるる小こ雪ゆき全ぜんくくままええるるゆゆふふ手てををくくてて  
 変あるるまま漏もハハ次第しだいふふここりり座敷ざ敷きの内うちふふくくままららもも大おるる氷こ柱しらを  
 見みるる時ときあり是こゝ暖ぬ国くにの人ひとふふええせせくくててああららるる  
 百樹ひゃくじゆ曰い余よ越こ遊りゆくく大お家やの造つくりりややを見みるる小こ楹ちやの太おくく江戸えどの

土藏どぞうのごご天井てんせい高たかくく櫓間らま大おほききとと雪ゆきの時とき明あををととるる  
 ととあありり戸障と子こ骨ほね太おほくくとと手て丈ぢやう夫ぶああるるゆゆふふ國くに鴨鴨柄柄もも廣ひろく  
 厚あつくくままるる大おほ材ざいをを用もちふふ事こと目めをを駛あせせりりここはは皆みな雪ゆき小こ潰つぶささるるの  
 用心うしんありりとと江え戸どの町まちふふいいの店みせ下したをを越こ後ご小こ雁かり木ぎ檼しほといいふ雁かり木ぎの  
 下した廣ひろくくここ小こ荷か駄だををもも率ひへへままりりここはは雪ゆき中ちゆう小このの庇ひ  
 下したをを往ゆ來らいの為ためあり余よ越こ後ごより江え戸どへ飯い時とき高たか田でんの城じやう下したをを通とほ  
 ぐぐここはは北きた越こ第だい一いつの市いち會かいあり高たか工こう軒けんををああるる百ひゃく物ぶつ備びささるるとと  
 りり兩りゆう側がわ一いつ里り余よ庇ひ下したつつききここのの中ちゆうをを往ゆここ甚しんくく意い快かいありりき  
 文ぶん墨ぼくの雅が人にんもも多おほくくととままりり旅りよ中ちゆう年ねんの凶きやうささるる小こ遭あ飯い家けをを急いそぎぎ  
 ゆゆふふ刺さをを入いれれここ今いま小こ遺い憾げんととままるる

○雪中歩行の用具

雪中歩行の具初編小其圖を出いししが製せい作さくを記きささるるととああるるに



右の外男女の雪帽子雪下駄其餘種々雪中歩用の具あきども薄  
雪の国小用ある物小似するはこ小省く



百樹曰余  
北越小遊びて  
牧之老人が家小  
在し時老人  
家僕小命ん雪を漕  
形状を見せしる京水傍小  
ありて此圖を写り穿物ハ  
機。縫あり戲小穿てしるが  
一歩も進こあしる家僕があめむ馬を御さるごとく

○ 轄

轄 字彙 禹王水を治し時戴する物四ッあり水舟陸舟車泥舟  
轄山舟標 註書 経 志るは比轄といふもの唐土の上古よりありしぞく  
彼ハ泥行の用るる雪中小用あるとハ製作異あつて轄の字ハ  
○ 菟。核。秧馬諸書小散見を或ハ雪車。雪舟の字を用ふる俗  
用あり

そもく此轄といふ物雪国第一の用具人力を助事船と車小同く  
且小作事最易きは圖を見て知るべし堀川百首兼昌の哥小  
初深雪降ふけくまあもち山越の旅人轄小のまてこの哥をもつ  
ても我国小そりをつるの古をまへる前中も志をくしるごとく  
我国の雪冬ハ凍さるゆゑ冬小轄をつるハ雪小ちらりく擲ととな  
ら轄ハ春の雪鉄石のごとく凍さる正三三月の間小用ふべきものこ

其時ふらるを里俗輜道あり〜と云  
俳諧の季寄ふ雪車を冬と云ふ詠よりさきとて雪中の物ありと  
春の季ふら似氣あり〜古寄ふも多し冬ふらあり實ゆらたがふとも  
冬と云ふ可あり

輜ハ作り易物也名ちやく〜農商家毎ふ是を貯ふさきとて載るものふ  
より〜大小品々あり〜作りやう〜皆同トヤうあり名も又あり〜只  
大なるを里俗小修羅と云ふ大石大木をのこるあり

山々の喬木も春二月のころの雪小埋り〜梢の雪ハ稍消て遠目ゆも  
見ゆ〜此時薪を伐ふ易け〜農人等おの〜輜を拖て山ふ入る或ハ  
そりを〜藁小置もあり常ふ見上る高枝も埋り〜雪を天然の足  
場と〜心の伏ふ伐とり大く〜六把を一人ま〜と云ふありさ〜下ふ三把  
を並べ中ふ二把上ふ一把と〜を縄ゆ〜強く縛〜藁小臨が〜蹉跌小

凍る雪の上あり〜幾百丈の高も一瞬の間ふ〜ふらるを輜小  
のせ〜引〜或ハま〜山ふ九曲あるゆ〜件のご〜小傳〜薪の  
輜小乗り片足をあそび〜是ゆ〜楫をとり船を走ら〜と  
難所を除く〜数百丈の藁小〜一ツも過〜其術学ど〜  
自然小得る処奇〜妙〜あり

輜を引て薪を伐〜行〜二三人の食を草ゆ〜編  
〜る袋ふら〜輜小〜〜とあり山鳥〜と〜をあら〜む〜  
き〜り袋をやが〜食を喰尽〜樵夫〜とをあら〜む〜今日の生業  
ことゆ〜た〜や焼飯ふせん〜と打より見〜一粒もの〜島  
どの〜樹上ふあり〜啼人〜鳥を睨〜詈り空肚をか〜  
輜哥〜輜をひ〜事〜と〜その人の〜  
そりをひ〜あ〜と〜是を輜哥〜と〜をあら〜樵哥あり

唱歌の節も古雅ありのあり親ありひい夫山ふり轄を引てうへ  
小遠く轄哥をきて親夫のうへをあり轄小遇処まむふひで親夫  
をひ轄小積る薪小跨せし妻や娘がこをひひつこも又轄哥を  
うたうてうへと質朴の古風今目前小存せり是繁花をまきさる幽  
僻の地あるゆゑあり

春もや景色とのふらひ梅も柳も雪ふらうづのまき花も緑も  
あつらひさうふらひ二月の空ひさきふあをまきつらつ朗る  
窓のゆへ小書讀をりも遙小轄哥の聞ふらふも春めきさうは  
是ハ我のこ小あゝと雪国の人の人情ぞう

百樹曰我が幼羊の頃ハ元日のあつらひ扇くと市中をうへあ  
りく声あひひ白酒くの声も春めきこも心も朗ありしは此声  
今あり鳥追の声はさうあり武家のつらつ町小遠所ふ

江鯨の鮫鯛のまきことうる声今もあり春めくもの三月ハ  
桜草うる声小花をひひ五月ハ鯉く小白妙の垣根をまきふ  
七夕の竹やまハ心涼く師走の竹やまハ竹ありあり聞小忙物皆  
季小應トて声をまき情小入る事天然の理あり胡茄の悲も又  
然らん件の人の声ありまきや春の鶯ありひ蛙夏の蟬秋  
の初雁鹿虫の音冬の水鶴をや本編轄哥をきて春めきさう  
まきこハ真境實事文客の至情あり我是小感くくら小教言  
を置く轄哥の春めくこと江戸人必もひもよる奇情あり  
こも小似る事猶諸国もあつらひ

糞をのまき轄ありこをのまきわふ小く作りる物あり二三月の  
ころも地と雪ありさうあつらひ渺くさう田圃も是下小在りて持  
分の境もさうふらうらうらうあつらひ糞のそりを引てさう小來り



秋月産牧草



兒童垂氷を  
轆のそ大持の

つら

轆全図

形大小定尺あり載物に  
随て造る木材は堅木  
以用ふ

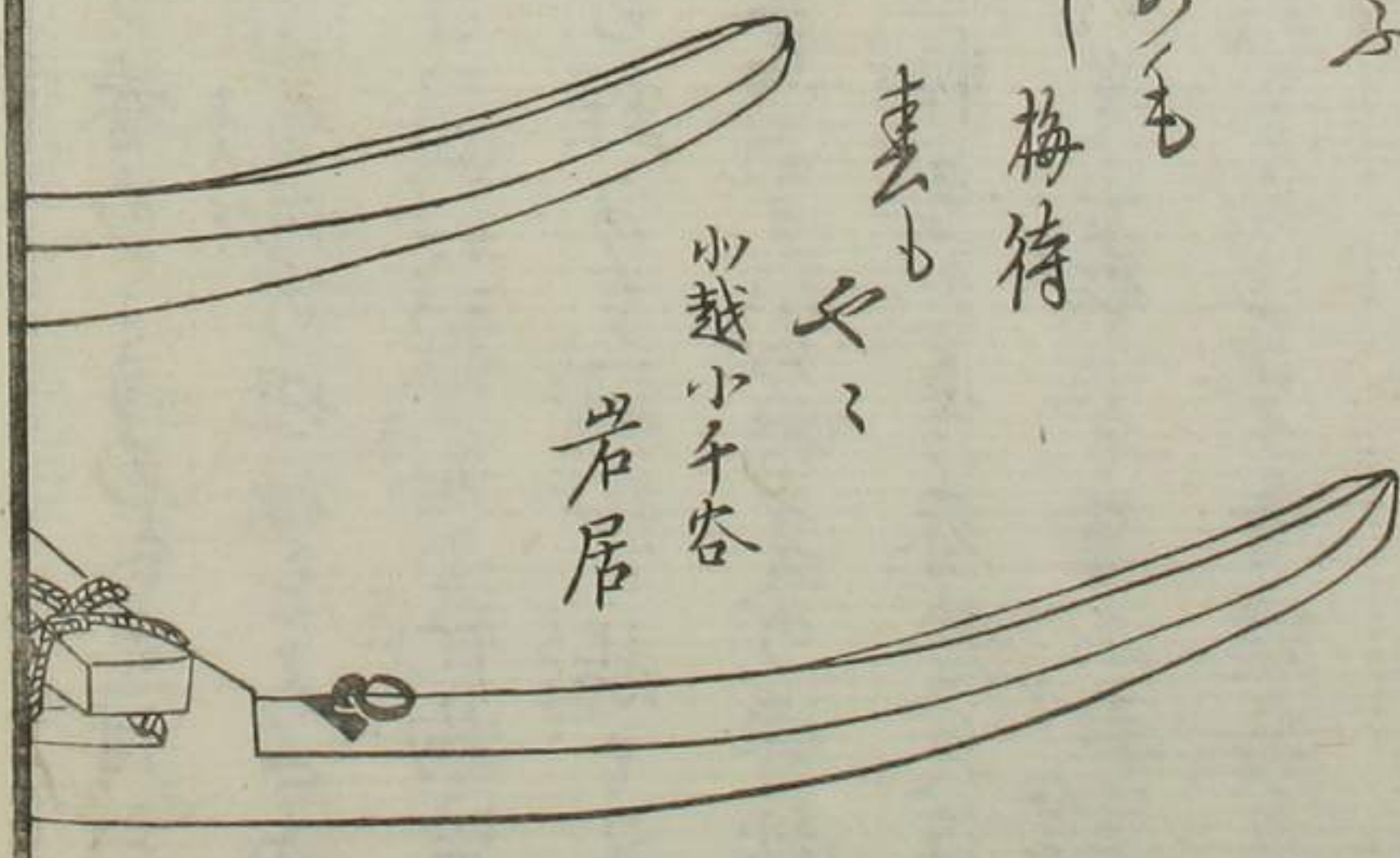
梅待  
梅待

妻も

々々

小越小千谷

岩居



まなび  
学をして遊ぶ  
時ハ妻あり



雪のゆふ一點の目標もあき小雪を掘くと井を掘が如く小く糞を  
入る小我田の坪小い事一尺をもあきるもこと我か農奴等も  
事あり荒く雪上何を目的小くかくいさるごと問ひ小目あて  
たる事ハあきる心小くせとちり所との坪小をづま事ありとい  
り所為ハ賤けとも藝術の極意も小あきるぞちりるゆふ  
ろ小あき初学の人藝小進の一端を示す

輻の大あるを里言小修羅とい事前小いりとも小大材木あきハ  
大石をのせとひくを大持といひくせ京都本願寺御普請の時末口  
五尺あり長さ十丈ありの楯を抱事ありさか時ハ修羅を  
二も三もかきあり材木ハ雪のあきる秋伐りてそのま山中小き  
輻を用ふる時小いりてひきいりか大材をも抱をりて雪の堅を  
あき田圃も平一面の雪あきひく(直道小ひき)ゆめ甚

舟あり修羅小大綱をつけ左右小枝綱のくまらありまのさき小  
本願寺御用木とい職を二本持の信心の老若男女童等までも賤の  
如くあきりてことをひく木や音頭取五七人花やうる色木綿の衣  
類小彩帯の魔採て材木の上小あり木やをうらふその哥のツ小  
アウさだ〜兎が〜耳ハあきら〜母の胎内小〜時小笹の葉  
をのま〜ア〜耳が〜大持がうら〜花の都りだ〜  
同音小「〜」そのま〜  
兎曹ら手遊の輻もあり氷柱の六七尺もあるをとり小のせて大持  
の学びをり木やをうらひ引あきて戯とあきる暖国ハ  
あき〜聞とせざる事あき〜猶輻小種くの話あきともさの  
〜〜〜〜

○春寒の力

春ふらふら寒氣地中より氷結あがるその力礎をあげて椽を  
 反しあひの踏石をも持あがる冬ふらふらと寒さるともかゝる事あり  
 さまじくも雪も春へ凍る軸をもつらふらと屋根の雪を掘のけつて  
 上ゲおくを里言ふ掘揚とらふ前より往來の路も掘あげあり山  
 をあもゆゑ春雪のこぼるふらふら雪の山小箱梯のごとく階を  
 作りて往來のたよりとをさうの所らつらふらもあるゆゑ小下階の齒小  
 釘をあらへ打て蹉跌さる為とを唐土ゆゑ是を標とて山小のゆゑ小  
 まづさる履とを標和訓カシキとあり

○シガ

冬春ふらふら雪の氣物ふらふら霜のむらふら雪の氣入りて坐敷小シガをあらす時あり  
 シガとの戸障子の隙より雪の氣入りて坐敷小シガをあらす時あり  
 此シガ朝暾の温氣をうらうら處の解とあつる春の頃野山の樹木の下

枝ハ雪ふらふら雪の消る小シガのつきつら玉りて作り  
 する枝のやうゆゑ見事あるものあり川辺あつて雪とあつて者ふら髪うけの毛  
 ふもシガのつく事あり此シガ我が塩沢小まきとあり郡の中  
 小出嶋ありあり多し大河小近きゆゑ水氣の霜とあつるゆゑあつらん

○初夏の雪

我国の雪里地ハ三月のところから夏なつ次第しだいに消朝あさハ凍こと鉄石の  
 如くふるほど日中ひるハ上より下よりまきゆゑ月末しげハ目めも  
 るやと小昨日今日と雪の丈け低くありゆゑ雪も降まると雪囲と  
 うと取のけ家のやう庭あつて雪をも掘まつる小雪凍りて堅きゆゑ  
 雪を大鋸おほのこぎりふら大鋸おほのこぎり。里言ふひきつらふらその四角あつて雪を脊負せおひひ  
 あつての擔持おほのこぎりふらと暖国の雪とハ大小異り雪小枝を折と下と折  
 丸太をとてさざりくげおきつる庭樹あつて解とけのささるか小梅と

雪の中の蒼をよくとて春待をありとて春の末あり此時のいりて去  
 年十月以来暗り〜坐敷もやう〜明くあり〜盲人の眼のひらき  
 する心地せ〜離は〜桃の節供の各の〜花は〜あり四月のいりて田圃の雪も斑も〜去年秋の彼岸の野  
 菜の〜雪の下の崩れを梅の盛を〜桃櫻の夏を春と雪の小  
 埋り〜泉水を掘り〜去年初雪より以来二百日あり黒闇の水  
 のあふあり〜金魚の鯉も〜げの浮緑も言や〜五月のいりて人の手をつける日陰の雪は依然とて山を  
 あり況や山林幽谷の雪は三伏の暑中あり消る所あり

○削氷

百樹曰余丁酉の年の晩夏取見京水を従て北越遊し時三國  
 嶺を踏り六月十五日あり〜小谷の底の鶯をき〜

足のこ小雪を聞く我も〜谷のいりて〜の山あり  
 拙作の〜も實境の〜記を此嶺ら〜四里山徑隆堀〜  
 数武も平坦の路を踐む浅見との山駒宿り猶〇二居嶺ニを越え  
 て三俣との山駒宿り芝原嶺を下り湯沢小抵んとする途をて  
 遙小一楹の茶店を見る底の〜小床あり〜浅き箱やうのものの小  
 白く方ある物を置ら〜遠目小と石花菜を賣あ〜口あり上る  
 こと〜山を〜暑も〜汗も〜小足も  
 つ〜茶店あり〜京水と〜小〜腰を  
 うけかの白き物を見る〜雪の氷ありけり六  
 月小氷を〜事江戸の目あり最珍〜〜熱視バ  
 深さ五寸計の箱小氷を〜中小踏石やうの雪の氷を  
 賣り茶翁小向〜山蔭の谷あり〜なま〜

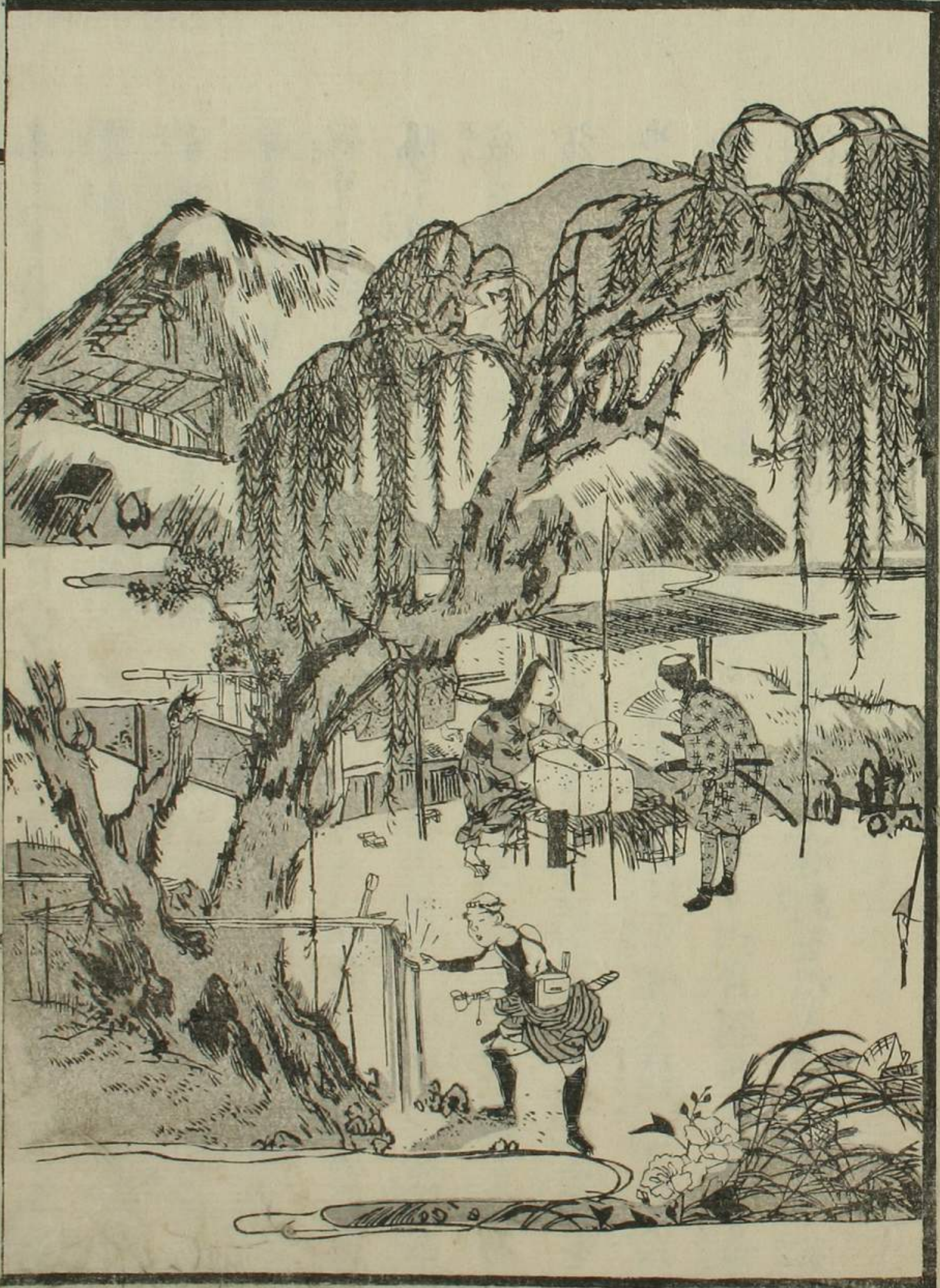
きりめんとりあさるるもひらきば蒟菜刀を把盜のあつさく  
 と音へ削りし豆の粉をうけしり氷小黄子粉をうけし  
 る江戸の目小見も慣れ可笑けき京水と相目へ笑を志ひ  
 つは價をささるる今もささるる豆の粉をうけざるをささるる  
 掛小用意しる砂糖をうける削氷小齒もうくさるる暑を  
 ささるる珍しき事しんごさ

そもくこのけり氷との物珍味とさる事古書小散見せし  
 その中小定家卿の明月記小曰「元久二年七月廿八日途より和  
 哥所小参る家隆朝臣唐櫃二合を取寄らるる破子。凡土器  
 酒等あり又寒氷あり自刀を取り氷を削る奥小令事甚し」  
 本書ハ件の元久二年乙丑より今天保十一年まで凡六百三十余年を  
 漢文と歴て古人の如く削氷を越後の山村小賞味しる事珍とさるる

奇とさるる實の好古の肝を清くせ

○按ふの氷の本訓とありと訓ハ寒凝の義ありと士清翁が和  
 訓の氷室の事俳諧の季寄とありのあどゆもさる  
 ことば普人の知りたる事ゆゑ周禮ありとさるる唐土のゆゑあり  
 ありしことあり 御国ハ仁徳紀小見るとさるる古きを知ら

ア延喜式の山城国葛城郡小氷室五ヶ所をいざせり六月朔日  
 氷室より氷をいづる朝庭小貢献をを諸臣も領賜事  
 年毎の例ありあり前小引明月記の寒氷ハ朝庭より  
 の古例の賜ありありいづる氷を賞味せしことあり  
 七月廿八日あり六月朔日ありする氷七月廿八日まで消せある  
 べき明月記ハ千字百幕の書あり七六の語とさるる氷室を  
 出し六月の氷朝を待てを蓋貢献の後氷室守が私小出せり



六月 賣雪圖





鳥の人ハ松島まつしまの月つきもあまのまじりあまのまじりのまじりも飽あちる物ハ孝心  
あり我子の顔かほと藏置たくわへ黄金こがねの光ひかりあり

○雪の多し

越後国南ハ上州じやうしゅう小隣ことなり魚沼郡うをのまあり東ハ奥州羽州おくしゅううしゅう隣となり蒲原郡ふはら岩船  
郡いわふねあり国堺くにさきハいづとも連山れんざん波濤はたうをあらめ雪多ゆきおほし一東北ハ鼠ねずみノ関せき岩船  
出羽でひや西ハ市振いちぶり越中えちうの堺さき小至こいたの道みち八十里はちじゅうり間都まんと北きたの海濱うみづらあり海気うみけ小よ  
りて雪一丈いちじやうふいてを鮮あざ少すくあり又消きも早はや一頸城郡くびさきの高田たかたハ海うみを去さ事  
遠とほくとも雪深ゆきふか一文化ぶんかのとも大雪おほゆきの時高田たかたの市中まち一雪ゆき  
埋うりて闇夜あんやのごとく昼夜ちゆうやをともぐる事こと十余日じゆじふにち市中まち燈あかりの油あぶら又諸人しよじん難  
免まぬせし小御領こみりやう主ぬしより家毎いえごと小油こあぶらを賜たまひ一事ことあり此こゝ時とき我塩わしほ沢たくも大  
雪ゆきふりて夜昼ちゆうちゆうをともぐれば家雪いえゆきふりてまじり日光ひかりを見みざる事こと十四日じゆじふにち連日れんじつ  
家いえあつた雪ゆきをりて人ひと氣鬱きふさ悶ぼん一病びやうをあらふ事こともありけり

百樹曰余牧之老人ひやくじゆいよカ此書こゝの稿本こうほん小就せうじゆ増修ぞうしゆの説せつを添上そへあが梓すゐの  
為ため小備書よひり授まか一本いっぴんを作つくるをり一老人いっしやうじんカ寄よる書中しよちゆう小  
當年たうねんハ雪遅ゆきおそく冬至とうじ小成せうじやうても馭中ごちゆうの雪一尺いちせきふりて此日こゝ次つぎ中ちゆう  
今年こゝねハ小雪せうせうありんと諸人しよじん一統いつたう悦えつび居いる所ところ小廿四せうじよ日にち黃昏わうこんより  
降ふりて廿五にじふご六む七しち八はち九く日にちまで五日ごにちの間ま昼夜ちゆうやふりて事ことをり一丈  
四五尺しよごふしふりてび申まをすい毎年まいねんの事ことあら不意ふいの大雪おほゆきふりて廿七にじふしち  
日にちより廿九にじふくにち日まで馭中ごちゆう家毎いえごとの雪掘ゆきほりふりて混雜こんざついり一簷いん外がわ急いそ玉たま  
山やまを築き戸外かどがわつりていり一惘むごり申まをすい今日けふも又大雪おほゆき吹ふく相成あひな家内いえうち  
暗くらく蠟燭ろうそくふりて此状こゝじやうをあらめ申まをすい何程なんぢやう可降こくわう哉や難計なんけい一同心いつしん  
痛いたいり一居申いすまをすい下畧げりやく是當年こゝねん天保十てんぽうじゆ十一月じゆいちごう廿九にじふくにち日出での尺翰せきわんあり  
此文こゝをりて越後の雪えちごのゆきを知しるべし。余越後の夏あひ小遇せうぐ一いっ小五  
穀こく蔬果そくそくの生育せいよく少すくくも雪ゆきを畏おそる色いろあり一山景さんけい野色やいろも雪ゆきあ





春の梢  
雪の消るのち  
再び雪の  
降る景

雪景二編卷之上

九七

文英堂藏



佐浦詣堂押圖

雪景二編卷之上

文英堂藏

りしとふかひのこまを雪の浅き他国小同ト五雜組小部百草雪を畏  
むしと霜を畏る蓋雪ハ雲小生ト陽位也霜ハ露小生ト陰  
位也とのり越後の夏を視て謝肇淛カ此説小伏せり

○浦佐の堂押

我住塩沢より下越後の方二宿越六日町浦佐との宿ありらる普光  
寺との真言あり寺中小七間四面の毘沙門堂あり傳ふ此堂大同二  
年の造営ありとを修復の度毎小棟札あり今猶歴然と存毘沙門の  
御丈三尺五六寸往古椿沢との村小椿の大樹ありとを伐て尊像を作り  
しとを作名ハ傳らむとさうぬ像材椿ををのりしと此地椿を薪とをさ  
るのこま出ありゆゑ小椿を植む又尊冥鳥を捕を忌玉ふゆゑ小諸鳥  
寺内小群をあり人々を怖む此地の人鳥を捕ありハ喰ハ立所小神  
罰ありたとの遠郷ハ聳娘小ゆきと羊を歴ても鳥を喰む必凶應

あり冥驗の照くる事此を以て知る一ささ遠郷近邑信仰の  
人多しむりより此毘沙門堂小於て毎年正月三日の夜小限り  
堂押との事あり敢祭式の礼格とをさるゝありとむり有未  
たる神事あり正月三日ハもとより雪道ありとも十里廿里より来りて  
此浦佐小一宿一此堂押小遇人もあは近村ハゆゑとあり

○さて押小来りし男女まづ普光寺小入りし衣服を脱了身小持る物も  
もづり小置棄婦人ハ浴衣小細帯まもぬをたらしあり男ハ皆裸あり  
燈火を點ぐるころうの七間四面の堂小ゆゑ裸の男女推入りし錐をた  
つこの地より余も若かりしころ一度此堂押小あひか上ハあげし手  
を下さざる事もあつざるやと逼り立けり押との誰ともありサン  
ヨウくと大音小呼りし声の下小堂内小充滿する老若男女ヲサイ  
コウサイとよをりて北より南とありと押又よをりて西より東と

甚奇あり七間四面の堂の内小裸あり人々あつてあつてあつて髪を洗は  
 事ありぬやどるまが人の多きよりあつて此諸人の氣息正月三日の  
 寒氣や煙のごとく霧のごとく照せる神燈もことごとく為小暗く人の  
 氣息屋根うらふ露とあり雨のごとく小降人氣破風よりもきて雲  
 の立のゆるが如く婦人稀少小兒を背中小むきびつけく押し有ま  
 るの小兒啼あり常とあるの不思議あり況此堂押しさきうも  
 怪敷をうける者むりより一人もあらず婦人のあつた湯具をうり  
 あるもあつて箇処小噪雜く一人もあつたかゆき事をせすこと  
 あり〜毘沙門天の神罰を怖るゆゑあり裸なる所以ハ人氣少く堂内  
 の熱もること燃ごご〜あるゆゑ之願望小よりてハ一里二里の所より正  
 月三日の雪中寒氣肌を射ごごきを厭む柱のごとき氷柱を裸身小

脊負て堂押しさきうもあり二つあり三つあり小いさびらある人も  
 熱ごと暑中のごときゆゑ堂のやう小ある大なる石の盥盤入りく水を  
 浴び又押しさきうもあり一ト押しさき息をまむ七押七踊り止を定とす  
 踊といふも桶の中小半を洗ふごとくゆゑ小人々満身小汗をあらがひ  
 第七をとり目小い〜普光寺の山長耕夫の長手小筋を持人の手輦小乗  
 て人のあつて入り大音ふりり「毘沙門さまの御前小黒雲が降」とモウ  
 衆人「あんど〜さきつとモウ」山男「彩〜さきつと〜さきつと〜」とさらををり  
 あつて此きら内「摺」凶作あり〜外〜とをりあつて又志願の者兼て  
 普光寺へ達し〜小桶小神酒を入と盃を添て献む山男挑燈をりたを  
 人をむり〜者サ人をむりさきさき〜堂小入り此盃手小入且ハ幸  
 あり〜人の儀をり〜取んとし神酒ハ神小供むる状〜人小  
 散〜盃入の中へ擲ごごきを得る人の宮を造り〜祭其家うあつて

おのぎの幸福あり此てらんをも争ひ奪ふるも破るその骨一本よりとも田の水口よりおけこの水のかる田の熟實虫のつく事あり神美のあつる事あり人の知る所あり神事をらば人々誰散しと普光寺小入り初葉置る衣類懐中物を視る小鼻帑一枚と小失る事あり掠る即座小神罰ありあり。さて堂内人散ると後々の山長堂内小学幹をちりちり夏例あり翌朝山長神酒供物を備ふ後さぬ小進と捧ぐ正面小をむを神の忌ぬると昨夜ちりちり学幹す折小折あり是人散るのち諸神と小集り踊玉ありを踏をり玉ありといひつゝ神事をらば見戯小似ること多しとて凡慮を以て量識ぶる此堂押小類せし事他國ありとて姑記して類を示す

北越雪譜二編卷之一終

